



2011年
(平成23年)
8月29日
月曜日

あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第十一号

火の山からの挑戦状

トライアスロン開催!

青い空と、眩しい日差し。八月二十七日、夏真っ盛りの快晴のもと、『火の山からの挑戦状トライアスロン大会』三宅島2011が開催された。今年も、総勢二八名の選手たちが島内外から参加した。三宅島のトライアスロンは、スイム十五キロ・バイク四十キロ・ラン十キロのコースで、個人の部とリレーの部の二部門に分かれている。

錆ヶ浜で行われた開会式では、大会実行委員長の築穴辰雄さんと、三宅村長の平野祐康さんがそれぞれ選手を激励した後、全員で「みやげ〜!〜!」と掛け声を出し、選手たちはレースへの意気込みをより一層高めた。

選手で、二位を大きく引き離し、会場を盛り上げた。バイクに入ると、コースの治道から応援の拍手と「頑張れ〜!」という声が聞こえてくる。中には、家族や友人からの応援に手を振って応援する選手も見られた。早い選手は、バイクを終え、最後の種目であるランに入っている姿がちらほら見られ始めた。最後の種目ということもあり、選手たちにも疲れが見え始めてきたのが感じられる。これこそ、火の山からの挑戦状である。そんな選手たちを支えていたのは、やはり治道からの応援ではないだろうか。約一三〇名の参加者ということもあり、一人ひとりの顔を見ながら応援できる距離であることを感じた。だからこそ、応援された選手たちは最後までゴールを目指すことができるのだ。本トライアスロンのフィニッシュ地点では、選手たちはみんな笑顔で、時には応援してくれた友人や家族と、協力し合った仲間とゴール

テープに飛び込む姿が見られた。中でも、リレーの部で出場している三宅高校生三人組の『Mirake Boys』がゴールすると、会場からは歓声が沸き上がっていた。波の音と、夕陽に包まれた会場からは、レースを完遂できた歓喜の声に溢れていた。

(上地 里佳)



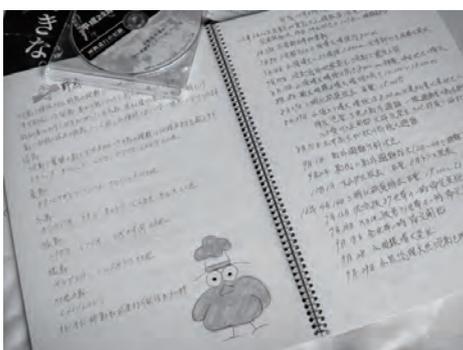
開校に向け、着々と準備中!

三宅島大学リサーチ成果報告会

八月二十六日、伊豆避難施設において三宅島大学リサーチの成果報告会が開かれた。今回のリサーチは、三宅島大学の開校日が近づいて来ていることもあり、三宅島大学の開校式、その後の講座計画を意識したもので、より具体的なものへとスポットを当てた発表が行われた。

旬に発表される予定である。発表される次第、『あしたばん』でも随時お知らせしていく。お楽しみに!

(上地 里佳)



加藤文俊研究室の学生チームは、「ポスターづくり」の講座の準備のため、島内の民宿を数十カ所ほど訪れ、三宅島に関する知識を深めつつ、島民の方々とも親睦を深めた(詳細は八月二十六日発行の『あしたばん』号外を参照)。開校式でハンドベル演奏を企画している安野太郎さんは、演奏者の募集と並行して、実際に三宅島在住の方を含めての実演を二日間行った。また、初めてリサーチに参加したBAI&ARTTAKOさんは、商工会女性部や栄養士の方々と交流し、「食」から見た三宅島の報告を行った。その他にも、アカコッコ館や神社仏閣など、三宅島に既にある情報施設や文化の発信方法についての報告も行われた。いずれの発表も、講座に発展していく可能性を持っており、どのような講座が開校されていくか楽しみだ。

具体的な講座日程や内容は、九月上旬

「三宅島大学」は、いつでもだれでも入学することができます。メールでの申し込み等も受け付けられます。準備がすすまられています。入学や受講、講座内容等に関する質問は、お電話で
04994-5-0984
三宅村役場政策推進室(三宅島大学プロジェクト実行委員会事務局)にお問い合わせてください。

三宅島物産展

新宿―三宅島の距離

東京都庁第一本庁舎2階の全国観光PRコーナーにて、三宅島の特産品販売が行われた。「三宅島にロック・オン！」映画「ロックンわんこの島」公開記念「三宅島パネル展」にあわせ行われたこの物産展、わたしが訪れたのは開催二日目のことだった。

受付で物産展の場所を聞くと、「昨日大盛況だったので、売り切れの商品が多いかもしれないですね」とのこと。足を運ぶと、「三宅島」と書かれたオレンジ色ののぼりがみえてきた。

そして早速、入り口には「パッションフルーツ売り切れ」の文字。未だに三宅島のパッションフルーツを食していないわたしは、「二日目でも、遅かったか!」と悔やんだ。



物産展にならぶお土産を眺めながら、販売をされていた三宅村商工会の村上さん、三宅村役場の北川さんにお話を伺った。都庁見学に訪れた方や、噴火前の三宅島にゆかりのある方が、懐かしんで食材などを買っていかれたそう。

三宅島に訪れるようになって、ことあるごとに「三宅島」の話をしている。三宅の海の綺麗さ、火山遊歩道を歩いたときの感覚、自然の壮大さ、なにより人のあつたかさ。そんな話をしていると、「わたしも三宅島に行ったことがあります」と声をかけられることが増えた。そのなかで共通しているのは、「また、行きたい」「風景を思い出す」と三宅島を懐かしむ言葉だった。物産展で、あしたばやパッションフルーツを手にとった方も、こんな思いを持っていたのだろうか、想像した。

わたしはまだ三宅島のリサーチからこちらに帰ってきて、三週間ほど。それでも、なんだか民宿で食べたあしたばの天ぷらや、にがったけの生姜焼きが懐かしい。竹芝から六時間、同じ東京にある三宅島。距離にすれば、新宿から三百キロほどだろうか。この不思議な距離感にある三宅島に、惹かれる。一度訪れた人は、同じような気持ちで共感しているように思う。物産展で買った、三宅島の味：あしたばクッキーをほおぼりながら、新宿をあとにした。

(大西 未希)

ちよつと、ひと休み。

ギャラリーカフェ カノン

コーヒーの香りが漂う店内。壁には、三宅島の風景が描かれた絵。心地よい音楽が流れ、人々はそれぞれの時間を心地よく過ごしている。三宅島伊豆地区にある、ギャラリーカフェ「カノン」である。ここは、三宅島で数少ない中のカフェであり、穴原さん一家が家族で営んでいる。今回は、『カノン』で提供している料理全般を担当する、大宜味詩野さんにお話を伺った。

大宜味さんは、三宅島で生まれ育ち、二〇〇〇年の噴火で東京へ避難。もともと好きだったタイピングや、海の動物に関することを学ぶ学校へ進学し、卒業後は三宅島に帰島。最初のうちは、ペンションサントモにて約二年間働き、観光客や地元の人々と接している中から「カフェ」の構想が出来ていったそう。提供しているメニューは、あしたばパンや天草のスイーツ、季節の果物を使ったものなど、三宅島の特産品を活かしたメニューが多い。これは、「島で採れるもので、島にないものを作る」という想いから生まれたもので、観光客だけではなく、地元住民からも人気の商品だ。

「やっぱり『島』が好きなんだよね」と、大宜味さんは笑顔で話してくれた。二〇〇〇年の噴火。当時中学生だった大宜味さんは、島が好きだったにも関わらず、全島避難により島を離れなければならぬ経験をしたことが「三宅島で何かしたい」という想いに繋がっているのかもしれない、と話してくれた。「カノン」がオープンして、約一年と二ヶ月が経った。カフェをしていく中で、観光客と直接話す機会ができたり、接点がなかった地元の人々とも話すようになったりと、より多くの新しい出会いが生まれたそう。このカフェが、三宅島に少しずつ浸透していった、そうやって続けていければ、それでいいんだよね。」と話す大宜味さんからは、三宅島への愛情を感じた。噴火がもたらした三宅島への被害は大きい。しかし、噴火があったからこそ生まれた芽もある。今回の取材はそのことを実感させてくれた。今日もカノンでは、島の特産品を使ったメニューが多くの人を楽しませているに違いない。また三宅島に来るときは、ふらつと訪ねてみようと思う。

(上地 里佳)



三宅島フォトコン2011

みなさんは、「三宅島フォトコン2011」をご存知だろうか。これは、今年から始まったフォトコンテストであり、募集テーマは、二つの部門に分かれている。自然風景や人物、歴史文化など、制限を設けない「フォトデータ部門」(データ形式での提出)と、2005年帰島以前の三宅島の写真を対象とした「アーカイブ部門」(紙媒体での応募も可)である。いずれも三宅島で撮影された写真であることが条件であり、島内外問わず、誰でも応募可能だ。「フォトコンを通し、島の新たな一面を知ったり、島の良さを再認識したりできる機会になって欲しい」という願いが込められたコンテストは、十一月末まで応募可能となっている。グランプリには、なんと賞金十万円、準グランプリには賞金5万円が贈呈される。「三宅島でカメラのシャッターを切ったら、即応募して欲しい。」と話してくれたのは、フォトコン2011実行委員会の津村さんだ。二十一年に一度と言われる噴火周期と共に生きてきた三宅島。あなたが何気なく写した一枚が、三宅島を物語る一枚となるのかもしれない。(上地 里佳)

【応募・お問合せ先】

▼三宅島フォトコン2011実行委員会

〒100-1212 東京都三宅島三宅村阿古

680-3 三宅島観光協会内

TEL: 04994-5-1144

WEB: <http://www.miyakejima.jp/>